

これが行法としての題目の内容をなすものであり、また事一念三千の世界である。こゝに日蓮聖人は、事一念三千の

本門の教えを説かれた教主親尊をもって、主師親三徳の仏と仰ぎ、本門の本尊と定められているのである。

ろんぎについで

室 住 一 妙

「御本尊は議論の対象にしてはいけない」といった古人の話が出たが、誠に御モットモである。しかし、そういう御本人がやはり盛んにギロンされていた事實は、之も亦やむをえないことなのであろう。そこで「本尊論の再検討」という今回の課題の内には、まづ第一にとりあげられねばならぬ一項であろうと思うが、しかし、突然のことで、お互いによほどの用意がなくてはならぬし、時間もかけてその検討方法を議さねばなるまい。今はたゞ少々余白をいたゞいて二、三のメモを留めてをきたい。

① すでに本尊論というコトバのイミそのものにおいて矛盾していると思う。それは尊いというコトバのイミすら並々の評価圏にはないようだ。しかし尊卑貴賤という以上、相対的序列はあり得る。社会圏の内には絶対境界にある天皇を至尊とつかうことは今は昔（近代）のこととして、信仰上には尊者を始めとして、世尊、無上尊、本尊等、みな神聖不可侵境をイミしていた。

② しかしそうはいうものの、わが日本仏教の内の通用語通念での本尊は、果してどれほど、絶対的・排他的な唯一

性をイミシたのか、慎重にたしかめておく必要はあろう。寛容なムードの中の信仰対象とでもいゝ得る本尊、これらは或いは日本民族宗教の多神教性や、真言密教の多神教性の影響が多分にあるのかもしれない。わが宗祖をめぐるあの当時と、それを遡る上代、それを降る中世より近代現代に至る、そうした長い雰囲気は認められよう。之に対して近代現代に於いては、キリスト教の信仰対象としての絶対的神概念が、むしろシゲキ的に影響してきてることも認められよう。

何よりも、まず吾が宗祖においては、本尊は最大最高の重要点である。「一エンブダイ第一の本尊」と仰せられるだけ、独一無二である。天下万民諸衆一仏衆となつて、礼拝すべき本尊である。

そういうことを今仮りに、たゞの表現としてでも認めるとせば、勝劣浅深の論議を否定し切つていゝものでもなからう。また天下万民が証明し得る、つかみ得るとせば、神聖不可侵ともいえないではないか。本尊論のコトバの矛盾よりも、本尊の絶対性、そのことにも矛盾がある。

③ さて、こゝには、今現に我々が奉じている本宗の御本尊について、本尊の論議は果して許されるのか・どうか？のロンギである。

両者の理由について、またその関連について考えたい。(A) まず不可許。本尊は絶対境・恩徳境である。ギロンは相對、凡夫位同士のことばをもってやり合うのである。大体、思想教養・性格・体験、それらへの傾向や疎密広狭の度によってどこまで話しが進ずると思ふのか。まして、御本尊についての知識だけは仮りに一定ハンキに定めたとしても、互いに一致することはなか／＼望むべくもないであらう。

ましてや、「一エンブダイ第一」という境位は、古今の賢聖の体験境を超えているというイミである。その本質に對して論議・研究で肉迫しようというのが、不可能な対象を可能と誤信して仕かけた演戲である。コッケイではすまない、愚劣ではすまない、恩徳境に對する冒瀆はまぬがれまい。よつて不可許とする。

(B) つぎは可許、いわゆる学、の場である。その場は広い無限に廣大である。「初めにことばありき。」と叫んだ人類の確信である。論議といゝ、弁証といゝ、弁証法はギリシャ以前以来の人類史の栄光の一である。原始仏教の三蔵中の論議もそれである。なお、正法時代から像法時代に入つて、第三堅固の説誦多聞とは、是非はともかくとして、大乘仏教の開展となつた。仏法の大きな流れではなからう

か。さてその行く方は如何に。

今仮りにリクツでいう。信仰せよと強く迫れば必ずその理由は問われよう。深く信じようとすればするほど、疑惑は出るのが当然。学が要求される。絶対なるがゆえに信ぜよというなら、その絶対性の成立は、相対性を予想せねばならぬように、絶対の真理は相対的事実が弁証していかねばならぬらしい。されば、理論理性は二律背反が運命らしい。そこで、いやでも実践理性へと指示されるのか。

(C) 「仏法とは道理なり」と宗祖の云われたこのことは、いわゆる理論性と実践性とを止揚したものではなからうか。いわば、知性と情意を統一した全人格の踏んでゆく道理であろう。而立より不惑知命・耳順と次第に熟し来たものは、「心の欲する所に従って矩をこえず。」^の「そういう古聖の行程にはたしかに一貫する道理がある。之を三世十方に施してもとらざる道、それが仏法ではなからうか。大聖世尊への道は、たしかに信に始まる。「信は道の元、功德の母」とは、宗教に於いてのみいわれよう、否、釈尊の宗教、また吾が宗においてよく強調されよう。

「一エンブダイ第一の御本尊を信じさせ給へ。相かまへくして信心強く候うて、三仏の守護を蒙らせ給ふべし。行学の二道をはげみ候ふべし。行学たえなば仏法あるべし。」

からず。我もいたし、人をも教化候へ。行学は信心より起るべく候。力あらば、一文一句なりと語らせ給ふべし。」

この聖意は、信から出た行と学とが、信を促進し、信を導進していくということ、信は行学を完成し、行学は信を円成し熟成するといえよう。即ち本宗の信は盲信でもない。全人格的・道理の信である。理論理性と実践理性によって鍛えられていく中道の道理こそ信の行程である。この信の初・中・終、初心より後心に至るまで常に仰がる、御本尊である。

さてこゝに於いて、本尊論議云々ということとはどんなイミをもちうるのか。いわゆる単なる学解上の論争や議論は非常に低次元の遊戯にみえてくる。いや危険な火遊びのようにも思われる。よほど警戒嚴重のハンキ内でのみ許されよう。とせば、強いて名けて不可不許という。

④ それでは、実際に我々はどうな心得が要るのかを少しく考えてみる。

卒直に云って、我々は全人格的生長を期そう。精神年令以上の靈性的問題として、幼より少・青・壯・老と生熟していきたい。だから、自分の靈性的年令の自覚は、おゝよそは確信して生きたい。教学上の六即、位の原理である。

そこで御本尊の論議についても、たゞの常識的ではなく、仏法正統の良識道理から考えて、異常性とか、狂的とかはもとより、不健全・未熟なども許されないのである。ことに秘義の教学的の扱いについては、非常に厳しいようである。有名な観心本尊抄送状の、

「秘之」・「見無二志」・「並座勿説之」・「乞願歴一見來輩」・「師弟共詣靈山」・「拝見三仏」、等の六句の連鎖は我々に対する宗祖大聖人の懇切な勸誡である。

こういう不可侵境において、しらず／＼、自ら誤り、他人を誤らしたとしたらどうであろう。お互いにみな、「未だ得ざるを得たりとおもい、未だ証せざるを証せりとおもふ」からこそ、軽卒にとりくみ、論議しているようである。ましてそれが論争沙汰となつてはなをさらのことである。まあ、著欲・懈怠の誘法はまぬがれたとしても、計我・淺識・嬌慢の三はのがれぬ。自らの不解・不信は他人にも影響し、誹謗を起させ、互いに軽賤し相い、憎み嫉みはては怨恨を結ぶに至る、十四誹謗つぶさに踏んでゆく。その結論が水かけ論でおわるどころではない。鉄石の火花を散らし、泥合戦ともなる。そうして永久の怨恨を残す。これは歴史が証明しているのではなからうか。

研究は自由である。しかし、そこに在るからそれを研究

するといふ、学者根性・研究者気質で、御本尊を研究し論議してはならないであろう。いくら研究者でも、そこにあるからとて、原子核は不用意には扱えない。原子核の火よりも放射能よりも恐しいのはたしかに阿鼻獄の火である。

追加、後日談。二月一日、某学生が来ていふには、

「先日、師匠が団參の節、頼んで帰りました。今、はがき伝道をしています、それに、某教団と本宗との相違をカントンに書いてもらうように、自分は自信がないから先生に、ひまをみて書いてくれるように頼んで行きました。」

私はしばらく考えさせられた。「君からお師匠さんにこういうイミのことを書いて手紙を出しなさい。『先生のいふには、御本尊の件は重要なことであるから、はがきで彼此論評するようなことは、あまりに軽卒に思える。次は、自信がないなら、自分自身訪問して道を求めようとしなないのか。大事なことを、自信がないまゝに、他人に書いてもらうて、それで御用に宛てるとは、どうであろうか？』」之に對してのお師匠さんの御返事を私にみせて下さい。それから、之とは別に、君は、さし当り、その答案を書いて私にみせて下さい。一しよに考えましょう。」と話した。

また、よくきく言葉だが、「本宗は本尊がまだ定って

ない。」と、さも、よそごとのように他人のせいにしてい
る。ほんとうは、自分たちの信心が決してきまっていないから、そ
う見えるのだし、また、そんなことばを恥しげもなく言え
ることこそ、宗祖に対して申しわけがない。ともかく、御
本尊の意味や、それに対する心もちや態度など、みんな生
き／＼した一つの体系なのではなからうか。

御本尊論の再検討ということは、何よりもまづ、お互い
が話し相うとき、血の通う話し合い（信心の血脈）の場と
ならなくては、かえって、つまぶかいこととならう。